

第2章 調査村の概要

著者	高根 務
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	561
雑誌名	マラウイの小農 - 経済自由化とアフリカ農村 -
ページ	29-50
発行年	2007
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00011780

第2章

調査村の概要

次章以降でマラウイの農村世帯の生計を分析するのに先立ち、本章では本研究のためにおこなった農村実態調査の方法と調査村の概要、および調査村における農業生産の概略を提示する。これらはいずれも、次章以降の分析にあたって必要となる基礎的な情報を提供するものである。

第1節 調査の方法

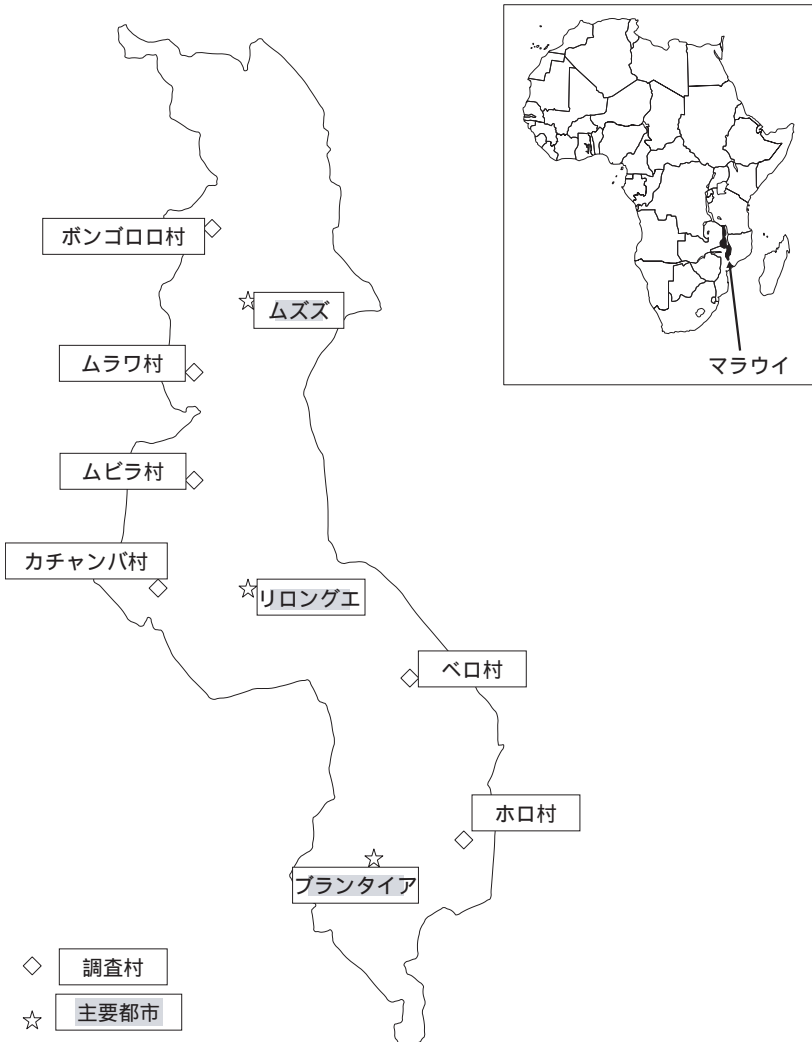
本研究のための実態調査は、2004年から2005年にかけて計6カ村でおこなった。調査村の選定にあたっては、小農タバコ生産が盛んであること、村の地理的・社会経済的環境が異なること、の2点を選定基準とした。タバコ生産が盛んである村を意図的に選んだのは、タバコがマラウイ経済を支える主要な輸出品であること、および近年の政策変化によりタバコ生産が小農世帯に急速に拡大していることから、農村世帯の生計におけるタバコ生産の役割を分析することが本研究の目的からして重要であると判断したためである。調査村の選定に先立っては、マラウイ各地のタバコ生産地帯で広域的に予備調査をおこない、農業省（Ministry of Agriculture, Irrigation and Food Security）の郡レベルの機関である郡農業開発事務所（District Agricultural Development Office）や、農民への農業普及活動をおこなう農業普及計画地区（Extension Planning Area: EPA）事務所からの情報をもとに、実際に複数の生産村を訪問したうえで調査村を決定した。なお本調査の目的は、地域ごとに異なる社会経済状況や在来制度を考慮に入れた事例研究をおこなうことにある。したがっ

て調査村の位置が地理的に偏らないよう配慮はしたものの、調査村の選択にあたって無作為抽出などの統計的代表性をもたせる手続きはとっていない。

調査村として選定したのはムチンジ郡カチャンバ村(Mchinji District, Kachamba)、マンガチ郡ベロ村(Mangochi District, Belo)、パロンベ郡ホロ村(Phalombe District, Horo)、ルンピ郡ボンゴロロ村(Rumphji District, Bongololo)、ムジンバ郡ムラワ村(Mzimba District, Mulawa)、カスング郡ムピラ村(Kasungu District, Mbila)である(図2 - 1)。このうちカチャンバ村とベロ村では2004年8月から10月にかけて、残る4カ村では2005年5月から9月にかけて調査をおこなった。

各村での標本世帯抽出の方法は次の通りである。まず総世帯数が比較的小さいカチャンバ村(31世帯)とムラワ村(29世帯)では悉皆調査をおこなった。ただしムラワ村では調査期間中に1世帯が不在であったため、この1世帯を除く28世帯(全世帯の97%)を聞き取りの対象とした。残る4カ村での標本世帯抽出にあたっては、母集団を村内の全世帯とし、これを前年度にタバコを生産した世帯群としなかった世帯群の2つに分け、それぞれから同数を無作為抽出する手続きをとった⁽²⁰⁾。ただしボンゴロロ村では非タバコ生産世帯が6世帯しかなかったため、標本の数もタバコ生産世帯のほうが多くなった。またベロ村のタバコ生産世帯の標本には女性世帯主世帯2世帯を意図的に含めた。ベロ村に存在する21の女性世帯主世帯のうちタバコを生産しているのはこの2世帯のみであり、その特色を把握することが本調査の目的からみて重要と判断されたからである。なおムピラ村には他地域出身で村内に土地をもたない農業労働者世帯が2世帯あったが、これらは通常短期で村を去る一時的な居住者であるため標本から除外した。このような手続きにより抽出した標本世帯の合計は全6カ村で186世帯(うちタバコ生産世帯116世帯、非タバコ生産世帯70世帯)となった。各村の総世帯数および標本世帯数は表2 - 1および表2 - 2のとおりである。なお6カ村全体の標本世帯におけるタバコ生産世帯と非タバコ生産世帯の割合はそれぞれ62%(116世帯)と38%(70世帯)であり、これは母集団におけるタバコ生産世帯と非タバコ生産世帯の割合

図2-1 調査村の位置



(出所) 筆者作成。

表 2 - 1 調査村の

	カチャンバ村	ペロ村	ホロ村
人口	109	513	262
総世帯数	31	115	78
タバコ生産世帯数	23 (74%)	39 (34%)	53 (68%)
非タバコ生産世帯数	8 (26%)	76 (66%)	25 (32%)
男性世帯主世帯数	22 (71%)	94 (82%)	42 (54%)
女性世帯主世帯数	9 (29%)	21 (18%)	36 (46%)
平均世帯規模 (人)	3.5	4.5	3.4
世帯主の平均年齢	41.5	38.5	39.7

(出所) 筆者調査 (2004年8月～10月, 2005年5月～9月) データから作成。

表 2 - 2 調査村の

	カチャンバ村		ペロ村		ホロ村	
	世帯数	%	世帯数	%	世帯数	%
標本世帯数	31	100	30	26	32	41
うちタバコ生産世帯	23 (1)	100	15 (2)	38	16 (5)	30
うち非タバコ生産世帯	8 (8)	100	15 (5)	20	16 (13)	64
標本抽出の方法	全戸調査		タバコ生産世帯 ・非タバコ生産 世帯それぞれか ら無作為抽出	タバコ生産世帯 ・非タバコ生産 世帯それぞれか ら無作為抽出		
標本世帯人口	109		128		104	

(出所) 筆者調査 (2004年8月～10月, 2005年5月～9月) データから作成。

(注) カッコ内は女性世帯主世帯数。パーセンテージは各村のタバコ生産世帯, 非タバコ生産世帯

(59%と41%) とかなり近い。したがって、以下の各章では標本世帯に限った分析を中心に進めていくが、標本世帯の分析から得られた知見は母数全体の傾向からそれほどかけ離れてはいないと考えることができる。

質問票を使った各世帯での実際の聞き取りは、チェワ語 (Chichewa) およびトゥンブーカ語 (Chitumbuka²¹) に堪能な大卒の調査助手 1 名の通訳と、調査村内から選んだ村民 1 名の案内を介しておこなわれた。すべての聞き取りには筆者が同席し、記録もすべて筆者が取った。聞き取りの対象としたのは、

人口および世帯数

ボンゴロロ村	ムラワ村	ムピラ村	調査村全体
360	151	348	1,743
69	29	76	398
63 (91%)	20 (69%)	36 (47%)	234 (59%)
6 (9%)	9 (31%)	40 (53%)	164 (41%)
51 (74%)	19 (66%)	62 (82%)	290 (73%)
18 (26%)	10 (34%)	14 (18%)	108 (27%)
5.2	5.2	4.6	4.4
42.3	48.4	38.4	40.2

標本世帯とその内訳

ボンゴロロ村		ムラワ村		ムピラ村		調査村全体	
世帯数	%	世帯数	%	世帯数	%	世帯数	%
33	48	28	97	32	42	186	47
27(8)	43	19(4)	95	16(3)	44	116(23)	50
6(3)	100	9(6)	100	16(2)	40	70(37)	43
タバコ生産世帯 ・非タバコ生産 世帯それぞれか ら無作為抽出		1戸を除いた全 戸調査		タバコ生産世帯 ・非タバコ生産 世帯それぞれか ら無作為抽出			
164		150		171		826	

それぞれの総数(母数)に占める割合。

カチャンバ村とベロ村については2003/04年度の農業生産、他の4カ村については2004/05年度の農業生産である。なお聞き取りに際しては、質問票に記された項目のみならず、必要に応じて土地制度、社会関係、農民のライフヒストリーなどについても質問した。

主要なデータは、次の方法で実測および推計した。まず圃場面積データについては、標本世帯が経営する圃場を実際に訪れ、全地球測位システム(Global Positioning System: GPS)を使って作物種類ごとに圃場の測量をおこ

なった⁽²²⁾。GPSでの測量結果に疑問がある場合、および圃場面積が小さい場合はメジャーによる実測もおこなったが、いずれの場合もGPSによる計測とメジャーによる計測の間に差はほとんどなかった。

収穫したタバコの重量については、農民からの聞き取りによって得られたデータを使用した。タバコはオークションでの販売に際し袋ごとの重量が計量されて販売記録に残るため、ほとんどの農民は生産量を正確に知っている。生産量を記憶していない場合が数例あったが、その場合は農民が受け取ったタバコ代金の手取り額を、村内の他の農民が得た1キログラムあたりのタバコ手取り額の平均で除して生産量を推計した。

収穫したメイズの重量については、穂軸から脱粒済みの場合は保存袋または容器の容量とその数から計算した⁽²³⁾。穂軸とともに貯蔵庫に貯蔵されている場合は、貯蔵庫の体積を計測するか、それができない場合は「穂軸付きメイズの総収穫量が牛車運搬で何回分⁽²⁴⁾であったかを聞き取って、貯蔵庫または牛車の容量(体積)から脱粒後の重量を推計した。推計にあたっては、穂軸付きメイズと脱粒後メイズの計測・計量を実際に筆者がおこなって得られた数値(穂軸付きメイズ1立方メートルあたりの脱粒後の重量は325キログラム)

表2 - 3 各

	カチャンバ村	ベロ村
位置(行政州)	中部州	南部州
村民の主なエスニックグループ	チェワ人	ヤオ人
相続制度	母系相続	母系相続
婚姻後の居住制度	妻方居住婚	妻方居住婚
タバコオークション会場までの距離(km)	82	235
化学肥料が購入できる町までの距離(km)	38	42
市場へのアクセス	普通	悪
農外所得の機会	小	小
標本世帯の作付面積平均(ha)	0.98	1.76
聞き取りの対象年度	2003/04年度	2003/04年度
2004/05年度の少雨の影響	-	-

(出所)筆者調査(2004年8月~10月,2005年5月~9月)データから作成。

を用いて計算した。

所得計算に際しての作物の価格は、販売された作物に関しては実売価格を、その他については各村における収穫時の市場価格を用いた。圃場での労働投入量については、農民の記憶にもとづき作物別・農作業別の実働日数を聞き取った⁽²⁵⁾。

第2節 調査村の概要

次に実態調査をおこなった6カ村の概略を提示する。ここで注目するのは、タバコのオークション会場や都市への交通アクセスの良否、住民のエスニックグループや相続制度などの社会的特徴、農業生産や非農業経済活動の特徴などに関する、各村の相違である(表2-3)。

調査村の特徴

ホロ村	ボンゴロロ村	ムラワ村	ムピラ村
南部州	北部州	北部州	中部州
ロムウェ人	トゥンブーカ人	ンゴニ人	チェワ人
母系相続	父系相続	父系相続	母系相続
妻方居住婚	夫方居住婚	夫方居住婚	妻方居住婚
70	78	163	240
15	1	20	5
普通	良	普通	良
小	大	小	大
0.58	0.80	1.18	0.94
2004/05年度	2004/05年度	2004/05年度	2004/05年度
大	小	小	大

1. カチャンバ村

第1の調査地であるカチャンバ村は、首都リロングエ(Lilongwe)と隣国ザンビアを結ぶ幹線道路から約6キロメートル離れた場所に位置し、リロングエにあるタバコのオークション会場までの距離は82キロメートルである。幹線道路近くにはオークション会場につながる鉄道駅があり、村民は袋詰めしたタバコを牛車に乗せてこの駅まで運搬する。村から幹線道路および駅までの間を結ぶ交通機関はなく、自転車と牛車が村民の主な移動手段および荷物運搬手段となっている。農業生産に必要な化学肥料⁽²⁶⁾などを購入できる町までは38キロメートル離れており、村民は所有する自転車や借り上げた自動車などで化学肥料を村まで運搬する。また村から約3キロメートルの場所には黄色葉タバコを生産する大規模農場があり、一部の村民はこの農場での賃金労働に従事している。

調査時のカチャンバ村には31世帯109人が居住しており、村民のほとんどは母系制をとるチェワ人(Chewa)である。全世帯に占める女性世帯主世帯の割合は29%(9世帯)であり、この割合はカチャンバ村が属するムチンジ郡の平均(38%)よりやや低い。この地域一帯では土地に対する人口圧力が高く、カチャンバ村では未利用の土地や休閑地がほとんどない。村で生産されている主な作物は、メイズ、タバコ、落花生である。主食であるメイズは村民にとってもっとも重要な作物であり、全世帯が栽培している。メイズの品種については高収量品種と在来品種の両方が生産されており、化学肥料や堆肥の使用の有無およびその量については、世帯ごとにかんがりのばらつきがある。落花生は、自家消費と販売用の両方に供される。タバコ生産には23世帯(74%)が従事しており、そのうち女性世帯主世帯は1世帯のみであった。村では1990年代にバーレー種タバコの生産が自由化される以前から、暗色火干タバコが生産がおこなわれていたが、調査時点でタバコ生産に従事している農民は全員バーレー種タバコを生産していた。村内で飼養されている家畜に

は、ウシ、ヤギ、ニワトリがある。このうちウシを飼養しているのは比較的裕福な5世帯(16%)で、いずれも牛車も所有していた。なお牛耕はおこなわれていない。

2. ベロ村

第2の調査地であるベロ村の大きな特徴は交通アクセスの悪さにある。南部マラウイの商業都市リンベ(Limbe)²⁷⁾にあるタバコのオークション会場からベロ村までの距離は235キロメートルで、カチャンバ村の約3倍の距離である。また郡都マンゴチ市(Mangochi)からも42キロメートル離れており、マンゴチ市からの未舗装道路はベロ村の入り口で終わり、数キロメートルにわたって点在する各世帯には徒歩でしか到達できない。村で生産されたタバコはマンゴチ市にあるマラウイタバコ協会(Tobacco Association of Malawi: TAMA)所有の倉庫にいったん集められ、そこからオークション会場まで輸送される。化学肥料もマンゴチ市で購入できるが村からの定期交通機関はなく、村民は起伏の多い未舗装道路を自転車でマンゴチ市まで往復するか、あるいは14キロメートル先の村まで徒歩で行きそこから乗合自動車を利用する。このように化学肥料の購入には時間的・金銭的コストがかかるため、ベロ村でのメイズ作での化学肥料の使用量は他村より少ない。

ベロ村の総人口は513人で、総世帯数(115世帯)に占める女性世帯主世帯の割合は18%(21世帯)である。ベロ村はもともと母系制をとるヤオ人(Yao)が居住する地域に位置するが、村の人口の大半は土地を求めて各地から移住してきた移住民で占められている。村の過半数の世帯は1990年代以降に移住してきており、この地域でパーレー種タバコ生産が活発化したのも1990年以降である。タバコ以外に生産されている主な作物は、メイズ、タバコ、トウガラシ、キャッサバ、落花生であり、カチャンバ村と同様、主食であるメイズは全世帯が栽培している。なお村内でニワトリ、ヤギは飼養されているが、ウシを飼養している世帯はない。

3. ホロ村

第3の調査村であるホロ村はマラウイ南東部に位置し、モザンビーク国境からは直線距離で約20キロメートルほどである。ホロ村の位置するパロンベ郡は人口密度が高く、かつ国内でもっとも貧困な地域のひとつである。リンベ市にあるタバコのオークション会場からホロ村までの距離は70キロメートルであるが、未舗装の悪路のため乾季でも車で2時間以上を要する。村民の多くが化学肥料を購入する郡都のパロンベ市までも同じく未舗装道路で、その距離は15キロメートルである。なおホロ村から1キロメートルの隣村では小規模な定期市が毎週2回開かれており、周辺一帯で生産されたタバコやモザンビーク側からもちこまれたタバコがこの定期市で取り引きされる。モザンビークからタバコの買付けをおこなうのは周辺の村民で、村民個々人が所有する自転車が運搬手段として使用される。

ホロ村の住民は母系制をとるロムウェ人(Lomwe)であり、20世紀初頭にモザンビークから移住してきた人々の子孫で構成されている。ホロ村では女性世帯主世帯の割合が46%(36世帯)と大きいことが特徴である。また土地に対する人口圧力が高いため、世帯あたりの総作付面積は調査した6カ村のなかでもっとも小さい。生産されている作物の種類には、タバコ、メイズ、落花生、キャッサバ、ヒマワリ、キマメ、モロコシ、トウジンビエなどがある。これらのうちタバコ以外の作物は同じ圃場内に混作されることが多い。タバコ生産に従事する世帯は53世帯(74%)あり、女性世帯主世帯のなかでタバコ生産をおこなっているのは16世帯(44%)である。1990年代にバーレー種タバコが自由化される以前、ホロ村周辺では暗色火干タバコが生産されていたが、調査時点では暗色火干タバコはごく一部で生産されているにすぎなかった。村内で飼養される家畜にはウシ、ヤギ、ニワトリ等があり、牛車もごく一部ではあるが所有する世帯がある。なお調査した世帯のなかに牛耕をおこなっている例はなかった。

4. ボンゴロロ村

第4の調査地であるボンゴロロ村はマラウイ北部に位置し、オークション会場のあるムズズ市(Mzuzu)からの距離は78キロメートル、郡都のルンピ市からの距離は16キロメートルである。上記3カ村と比べたボンゴロロ村の大きな特徴は、常設市や商店および政府関係事務所のある町に隣接しており、農業以外の現金稼得機会に恵まれていることである。とくに盛んなのは酒の製造と販売であり、村内全69世帯のうち26%にあたる18世帯が酒の製造販売に従事していた⁽²⁸⁾。また町には化学肥料などの農業投入財を販売する店や、オークション会場へのタバコ輸送を担うマラウイ全国小規模生産者協会(National Smallholder Farmers' Association of Malawi: NASFAM)の集積庫などもある。このためタバコ生産に必要な投入財の購入は容易であり、また集積地へのタバコの輸送に際して支出する輸送費も少なくすむ。またこの町から、ルンピ市およびムズズ市にむかう乗合自動車も毎日運転されている。

ボンゴロロ村の総人口は360人であり、村民は父系制をとるトゥンブーカ人(Tumbuka)である。タバコ生産に従事する世帯の割合は91%(63世帯)と調査村のなかでもっとも大きい。また女性世帯主世帯に限ってみても18世帯中15世帯(83%)がタバコを生産しており、タバコを生産する女性世帯主世帯が少ないカチャンバ村やペロ村と大きな対照をみせている(この要因については第7章で詳しく述べる)。ボンゴロロ村でタバコ生産がおこなわれるようになったのは1990年以降に小農タバコ生産が自由化されてからであり、それ以前はメイズが主な換金作物であった。現在の村ではタバコとメイズが主要な作物であり、その他にトウジンビエ、キャッサバ、サツマイモなども一部で作付けされている。またウシを含めた家畜を飼養する世帯、および牛車を所有する世帯も他の調査村と比べて多く、牛耕もごく一部だがおこなわれている。

5. ムラワ村

第5の調査地であるムラワ村は、首都リロングエと北部の中心都市ムズズを結ぶ幹線道路から、未舗装道路を西に20キロメートル入った地点に位置する。ムラワ村からザンビア国境までの直線距離は12キロメートルと近く、タバコの収穫期になると村周辺にザンビア側から商人がタバコを買い付けにくる。ただし村民のほとんどは、買付け価格がより高いマラウイ国内のオークションにタバコを送って販売している。ムラワ村からムズズ市のオークション会場までの距離は163キロメートルで、村で生産されたタバコは幹線道路沿いにあるTAMAの貯蔵庫にいったん集められ、そこからムズズ市に輸送される。村から20キロメートルの幹線道路には常設市や商店がある町ジェンダ(Jenda)があり、村民は化学肥料をここで購入し自転車または乗合自動車まで輸送する。

調査時のムラワ村には29世帯151人が居住しており、住民は父系制をとるンゴニ人(Ngoni)である。2004/05年度にタバコを生産したのは全世帯の69%にあたる20世帯であった。全世帯に占める女性世帯主世帯の割合は34% (10世帯)であり、そのうち4世帯(40%)がタバコ生産をおこなっていた。1990年代に小農によるバーレー種タバコの生産が自由化される以前の村周辺では、主にトルコ種タバコの生産がおこなわれていた。しかし調査時点に村で生産されていたのは、ほとんどがバーレー種であった⁽²⁹⁾。

タバコの他に生産されているのは主食であるメイズ、落花生、大豆などであり、農作業では牛耕も使用されている。また村では天水による通常の生産に加え、乾季でも水が得られる低湿地での乾季畑(ディンバ[*dimba*]と呼ばれる)³⁰⁾での耕作が20世帯(69%)によっておこなわれている。ディンバでのメイズ作は通常よりも早い10月に播種し、1～2月には収穫できる(通常のメイズ作の収穫は3～5月頃である)。1～2月は前年の収穫が底をついて食糧不足になる時期と重なっており、この時期に収穫が得られるディンバでのメ

イズ作は世帯の自給食糧確保に重要な役割を果たしている。メイズの収穫後のディンバには、その後乾季に入ってから野菜類（ジャガイモ、トマト、タマネギなど）が作付けられて7～9月にかけて収穫がおこなわれ、自家消費用と販売用の両方に供されている。このようにディンバ耕作は世帯所得の向上や自給食糧の調達に貢献しており、これは他の調査村にはないムラワ村の大きな特徴である⁽³¹⁾。

6. ムビラ村

第6の調査地ムビラ村はマラウイ中部に位置し、オークション会場のあるムズズ市からの距離は240キロメートルで、調査した6カ村のなかでもっとも遠い。先述のムラワ村と同様、ムビラ村周辺にもザンビア側から民間商人がタバコを買い付けに訪れており、少なからぬ村民がオークションを通さずに民間商人にタバコを販売している（第5章第2節参照）。

ムビラ村は郡都のカスング市から5キロメートルと徒歩圏内の位置にあり、化学肥料等の農業投入財の購入は容易である。村内にはカスング市で定職（政府施設の夜警や下級公務員など）に就いている村民の他、同市で需要のある煉瓦づくりや石の切出しなどの農外経済活動に従事する村民も少なくない。このような農外経済活動が活発である点は、先に述べたボンゴロ口村に共通する特徴である。

ムビラ村には76の世帯（うち女性世帯主世帯は18%にあたる14世帯）があり、総人口は348人である。住民の過半数は母系制をとるチェワ人であるが、そのほかに父系制をとるンゴニ人やトゥンブーカ人も居住している。2004/05年度にタバコを生産した世帯は全体で36世帯（47%）、うち女性世帯主世帯は5世帯である。タバコとメイズ以外に生産されている作物には、落花生、大豆、サトウキビ、キャッサバ、サツマイモなどがある。村内ではニワトリ、ギニアファウル、ブタ、ウサギ、ハト、ヤギなどが飼養されているが、ウシ（および牛車）を所有する世帯は全村で1世帯のみであり牛耕はおこなわれてい

ない。

7. 調査年の特色

カチャンバ村とベロ村での調査で聞き取りの対象としていた2003/04年度の農業生産はほぼ平年並みであったが、タバコの生産者にとっては販売局面で2つの悪条件が重なった年であった。その第1は価格の低迷である。2000年以降続いていたバーレー種タバコの価格低迷は2004年も好転せず、オークションでの平均取引価格は1キログラムあたり1.09ドルの低いレベルにとどまった。この価格は、小農タバコ生産が急速に拡大した1994～1999年の平均価格1.43ドルよりも23%低い。第2はタバコ流通の混乱である。2004年のオークションでは、袋詰めしたタバコのなかにポリプロピレンなどの不純物³²⁾が多くみつき、買付けを拒否されるタバコが続出した。買付け拒否となったタバコは、不純物を取り除いたうえで再度梱包され、オークションに戻される。この作業のためにオークション全体の買付けプロセスが遅延し、その影響で生産者への代金支払いも大幅に遅れて支払いまでに数カ月を要した。このようなタバコの低価格と代金支払いの遅延はタバコ生産者のインセンティブを大きくそぐものであった。

残る4カ村で聞き取りの対象とした2004/05年度は、雨量不足の影響で農業生産が大きな打撃を受けた年であった。マラウイの雨季は通常11月末から3～4月頃まで続くが、2005年は2月はじめから雨量が極端に少なくなり、その後収穫時期まで雨量が少ない状態が続いた。2～3月にかけてのメイズが穂を形成する生育上重要なこの時期に雨量不足が続いたため、2005年のメイズ生産量は前年を大きく下回った。その結果国内では主食であるメイズの自給が困難となり、2005年の後半以降には政府および援助機関が国内各地で大規模に食糧配給をおこなう事態となった。またこの少雨の悪影響がもっとも大きかったのは中・南部マラウイで、調査村のなかではホロ村とムピラ村が農業生産で大きな打撃を受けていた。主食のメイズと同様に、小農が主に

生産しているバーレー種タバコの生産量も減少し、全国生産量は前年度よりも約2割の生産減となった。生産量が減少したことに加え、2005年はオークションでのタバコの買取り平均価格が前年よりもさらに低下し、1994年以降で最低の水準となった。雨量不足によるこのような生産減と低価格の影響で、調査村では少なからぬ世帯でタバコの作物所得がマイナスになる事態となっていた（第5章参照）。

第3節 農業生産の概要

次に調査村における農業生産の概略を明らかにする。表2-4は標本世帯の作物別作付面積をもとに、調査村全体の作物別作付面積を推計したものである。この表から、全作付面積に占めるメイズの作付面積の割合が64%と最も大きく、次いでタバコ(19%)の作付面積が大きいことがわかる。メイズとタバコについては第5章で詳しく検討するが、以下ではその他の作物と家畜飼養も含めた農業生産全体の概要を示す。

1. メイズ

マラウイの主食はメイズであり、調査をおこなった6カ村でもメイズはもっとも重要な作物である。聞き取りをおこなった186の標本世帯は例外なくメイズ生産に従事しており、世帯あたりの平均作付面積は0.63ヘクタールであった(表2-5)。またいずれの調査村においてもメイズの作付面積がもっとも大きいことから、農民はメイズに第一の重点をおいた作付けをおこなっていることがわかる。生産されたメイズは主に自家消費用として利用されるが、生産量の多い世帯では一部を売却するか、あるいは雇用労働力を利用した場合の労賃をメイズの現物で支払う場合も多い。

表 2 - 4 作物別作

世帯数	カチャンバ村		ベロ村		ホ口村	
	31		115		78	
	面積	%	面積	%	面積	%
タバコ	6.7	22	19.7	11	10.0	21
メイズ	18.6	61	124.9	67	35.1	73
落花生	4.8	16	9.4	5	1.9	4
他作物	0.3	1	33.7	18	1.0	2
総作付面積	30.4	100	187.8	100	47.9	100

(出所) 筆者調査 (2004年8月～10月, 2005年5月～9月) データから作成。

(注) (1) 推計の方法は、(タバコ生産標本世帯の平均作付面積×タバコ生産世帯総数)+(非タバコ(2)作付面積は借り入れた農地への作付も含む。メイズ圃場に混作されている作物はメイズしたがって表中の「落花生」「他作物」は混作されていない事例のみの面積である。

表 2 - 5 標本世帯の作

	カチャンバ村		ベロ村		ホ口村	
	標本数	面積	標本数	面積	標本数	面積
タバコ	23	0.289	15	0.506	16	0.189
メイズ	31	0.599	30	1.114	32	0.444
落花生	19	0.255	13	0.243	3	0.279
他作物	3	0.105	23	0.377	2	0.243
総作付面積	31	0.980	30	1.762	32	0.580

(出所) 筆者調査 (2004年8月～10月, 2005年5月～9月) データから作成。

(注) 作付面積は借り入れた農地への作付も含む。落花生および他作物は、混作されている場合を面積は作物を作付している世帯のみの平均。したがって総作付面積の平均は各作付面積の合計

2. タバコ

主に自家消費用に生産されるメイズとは異なり、タバコは販売を目的として生産される換金作物である。調査した6カ村では母集団の全世帯(非標本世帯含む)398世帯のうち、59%にあたる234世帯がタバコ生産に従事しており、タバコ作付面積の平均は0.35ヘクタールであった。調査村で生産されているタバコのほとんどがバーレー種であり⁽³³⁾、その生産は1990年代以降のタバコ

付面積合計の推計

(単位: ha)

ボンゴロ口村		ムラワ村		ムビラ村		調査村全体	
69		29		76		398	
面積	%	面積	%	面積	%	面積	%
21.8	38	7.3	21	15.8	22	81.3	19
33.7	59	17.9	52	42.7	60	272.8	64
0.7	1	4.9	14	8.7	12	30.4	7
0.8	1	4.5	13	3.5	5	43.8	10
57.0	100	34.5	100	70.7	100	428.3	100

コ生産標本世帯の平均作付面積×非タバコ生産世帯総数)による。
圃場面積に含めた。

物別作付面積の平均

(単位: ha)

ボンゴロ口村		ムラワ村		ムビラ村		調査村全体	
標本数	面積	標本数	面積	標本数	面積	標本数	面積
27	0.347	19	0.365	16	0.439	116	0.350
33	0.489	28	0.611	32	0.563	186	0.631
5	0.084	15	0.311	23	0.158	78	0.225
3	0.150	14	0.308	6	0.234	51	0.307
33	0.798	28	1.179	32	0.939	186	1.028

除く。
と一致しない。

生産自由化以降に開始されている。なおバーレー種の生産が小農に許可される1990年代初頭以前も、ホロ村では暗色火干タバコが、ムラワ村ではオリエント種タバコが一部の小農によって生産されていた。

タバコ生産には、種子、苗用薬剤、化学肥料、乾燥棚用資材、梱包用袋などさまざまな流動財費が必要である。またタバコ生産では雇用労働力が使われることが多く、タバコ生産にかかる経営費は他作物を大きく上回る。したがってこれらの諸経費をまかなうだけの粗収益が得られるかどうかによって、タバコの作物所得に大きな差が出る(第5章第2節参照)。

3. 他作物

メイズとタバコ以外に調査村で生産されている作物には、落花生、キャッサバ、豆類（大豆、キマメなど）、トウガラシ、ソルガム、ミレット、サトウキビ、コメ、ヒマワリ、サツマイモ、野菜類（トマトなど）がある。このうちベロ村で生産されているトウガラシ、ホ口村で生産されているヒマワリ、ムラワ村で生産されている大豆は、そのほとんどが国内の加工業者への販売に供されている。これら以外の作物はいずれも自家消費とローカルマーケット等での販売用の両方に供される。またムラワ村の低湿地でおこなわれているディンバ耕作では、主にローカルマーケットでの販売を目的とした野菜類が多く生産されている。

上記作物のいくつかは、メイズ圃場のなかに混作されて生産されている場合がある。混作される場合がある作物は、落花生、キャッサバ、豆類、ソルガム、ミレット、ヒマワリである。メイズと他作物の混作はとくに南部マラウイで多くみられ、調査した6カ村のなかではホ口村で多く観察された。南部マラウイでは土地に対する人口圧力が高く、世帯あたりの耕作面積が他地

表2 - 6 調査村の家畜所

	カチャンバ村 (n=31)	ベロ村 (n=30)	ホ口村 (n=32)
ウシ	0.84	0.00	0.12
ヤギ	0.61	1.59	0.67
ブタ	0.00	0.00	0.06
ニワトリ	2.71	8.17	1.85
その他	0.00	0.94	0.60
総価値(クワチャ)	3,770	3,968	3,978

(出所) 筆者調査(2004年8月~10月, 2005年5月~9月)データから作成。

(注) (1) 家畜の価値は各村での市場価格を使って計算し、カチャンバ村とベロ村の数値はRural

(2) 2005年調査時の為替レートは1ドル=115~121クワチャ。

(3) 数値は各村の母集団におけるタバコ生産世帯と非タバコ生産世帯の割合をウエイトとして

域より小さい。そのような状況のなかでおこなわれている混作は、狭小な耕作地を最大限に利用するために小農が採用している戦略のひとつであると考えられる。

4. 家畜飼養

家畜は小農世帯にとって重要な資産である。調査村で飼養されている主な家畜はウシ、ブタ、ヤギ、ニワトリなどである(表2-6)、その他にも、ギニアファウル、カモ、ハト、ウサギなどの小家畜が、事例は少ないが飼養されている。表2-6から明らかなように、家畜の所有数および所有家畜の見積もり価値は、ボンゴロ口村とムラワ村が他村よりも大きくなっている。その理由は、両村の住民であるトゥンブーカ人とンゴニ人の社会における家畜の社会経済的価値の高さにある。父系社会であるこれら2つのエスニックグループでは、結婚に際して妻が夫の側に婚入する夫方居住婚を採用している。そして結婚に際して夫方は妻方の親族に婚資(*lobola*)を支払う必要があり、その婚資として支払われるのがウシ(または相当額の現金)である。したがってボンゴロ口村とムラワ村においてウシの所有は、単なる農業所得の源として

有(1世帯あたり平均所有数)

ボンゴロ口村 (n=33)	ムラワ村 (n=28)	ムビラ村 (n=32)	調査村全体 (n=186)
1.26	0.75	0.18	0.51
0.47	0.31	0.27	0.70
1.01	1.90	0.30	0.51
9.11	9.15	5.94	5.88
2.77	1.85	3.02	1.48
31,668	23,939	7,776	12,180

CPIを使って2004/05年価格に変換した(×1.139)。

計算した加重平均である。

の価値だけではなく、婚姻に不可欠な資産としての社会経済的価値も具有している。

ウシは飼養されている家畜のなかでもっとも経済価値が高いが、その所有者は少なく全標本世帯の12%にあたる22世帯が所有しているのみである。またこれら少数のウシ所有者は、牛車も所有していることが多い。牛車は自家圃場での農作業（投入財や収穫物の運搬）で使用される他、他者に賃貸することによる現金収入源ともなる。またウシの飼養によって得られる厩肥は自家圃場での作物生産に利用されるだけでなく、一部では現金による売買もおこなわれている。なおマラウイ国内で牛耕がおこなわれている地域は少なく、調査村のなかでもムラワ村の一部でおこなわれているのみであった。

5. 農業関連資産

農具や機械は、土地、労働力、家畜などとともに、小農の生計を構成する重要な資産の一部を構成する。ただし調査村ではトラクターや耕耘機などの農業機械の利用は賃貸も含めて皆無であった。また牛耕もごく一部でしかおこなわれていない。したがってほぼすべての農作業は、鋤、鎌、鉋といった単純な農具を使った人力でおこなわれる。また化学肥料などの投入財や収穫物の運搬には自転車や牛車が使用される。標本世帯におけるこれらの農具および運搬手段の保有状況は表2-7に示すとおりである。なお運搬手段とし

表2-7 調査村における農具所有（1世帯あたり平均所有数）

	カチャンバ村 (n=31)	ベロ村 (n=30)	ホロ村 (n=32)	ボンゴロロ村 (n=33)	ムラワ村 (n=28)	ムビラ村 (n=32)	調査村全体 (n=186)
牛車	0.16	0.00	0.00	0.17	0.15	0.03	0.08
自転車	0.61	0.56	0.71	0.41	0.52	0.78	0.59
農具	6.29	8.38	5.85	9.11	8.72	8.16	7.52

（出所）筆者調査（2004年8月～10月，2005年5月～9月）データから作成。

（注）数値は各村の母集団におけるタバコ生産世帯と非タバコ生産世帯の割合をウエイトとして計算した加重平均である。

てバイクを所有する世帯が全標本世帯のなかに1世帯だけあったが、自動車を所有する世帯は皆無であった。各村に灌漑，水道，電気等のインフラはなく，農業はすべて天水に依存していた。